

## 黄泉の世界へようこそ

読者の皆様は、いきなりこのタイトルを目にされて、「一体これは何だ？」といぶかしく思われたかもしれません。我々は自分たちの研究分野のことを、（土の中の）殆ど知られていない世界という意味でしばしば（特に、 $C_2H_5OH$ を経口摂取した場合において）「黄泉の世界」と呼んでいます。（先日、他の分野においても同じ言葉が用いられているのを目にしました。何でせうか？答えは冥王星です。）

名古屋大学農学部は、1966年に名古屋市東山地区（コアラのいる動物園の近く）に移転し、現在に至っています。河野恭廣教授をはじめとして、山内章助教授・飯嶋盛雄助手（2人とも河野先生の門下生）の3人の教官がいずれも根の研究を専門にしており、その指導の下にある院生（6名）・学部生（5名、いずれも1993年度）も、テーマは様々ですが、全員が作物の根系を対象として日夜研究を続けています。従って、凝集力・チームワークという点では抜群です。

我が講座の根系研究の一大特徴として挙げられるのは、側根を含めたすべての根系構成要素を定量化の対象にすること、そして根系を定規を使って肉眼で測定することでしょう。もちろんルートスキャナーや画像解析装置もあるのですが、根長以外の多様な情報を手に入れるためには、今のところこれに優る方法はありません。この一見退屈きわまりなく見える作業を黙々と続けている人が、実験室には必ず誰かいます。時には調査が数週間におよぶこともあります。（そういえば過去には6ヶ月もの間、ひたすら根系調査に没頭されたという偉大な先輩方もおられます。そうでしたよね？K先生、Y先生。）まだ講座を決めていない3年生向けの実験にも、この作業はしっかりと組み込まれています。従って、作物学講座を希望する学生は、この厳しい試練に耐えた強者ばかり（のはず）です。

あと、うちの講座には何となくinternationalな雰囲気があるようにも思います。留学生が2人いるというだけでなく、青年海外協力隊に参加した人が通算で6人出ています。現在も、教官（!!）・院生に2人ずついます。学部生にもNGO活動をしている人や留学を希望している人もいます。このイメージに惹かれて、よくわからないうちに作物を選んでしまう人も中にはいるかもしれません。

言いたいことは尽きたのでこの辺でペンを置きましょう。エッ?? これではお前達がやっていることが全然わからないではないかって？ 大変失礼しました。農学部紹介パンフには、「根の土壌中での生長、養水分吸収機構、植物ホルモン生産などの機能、根の生長・機能と環境要因や他の土壌生物との関係、さらに根の諸性質の遺伝的解析などを行っている。これらの研究を通じて、植物の生育に果たす根の役割を解明し、植物生産機能の向上をめざしている。」とあります。現在、学部が続いて大学院も改組の嵐の中をさまよう船のような状態ですが、これから作物科学講座にどんな未来が待っているにせよ、我々はこの下線部分を常に念頭に置き、それに貢献する一員としての自信と誇りを持って根の研究を続けていくつもりです。そして、新たにこの分野に入ってくる人々に対して笑顔でこう言います。「黄泉の世界へようこそ！」